

日本の街・世界の地域

長崎市(Nagasaki) 長崎県 人口 43 万人

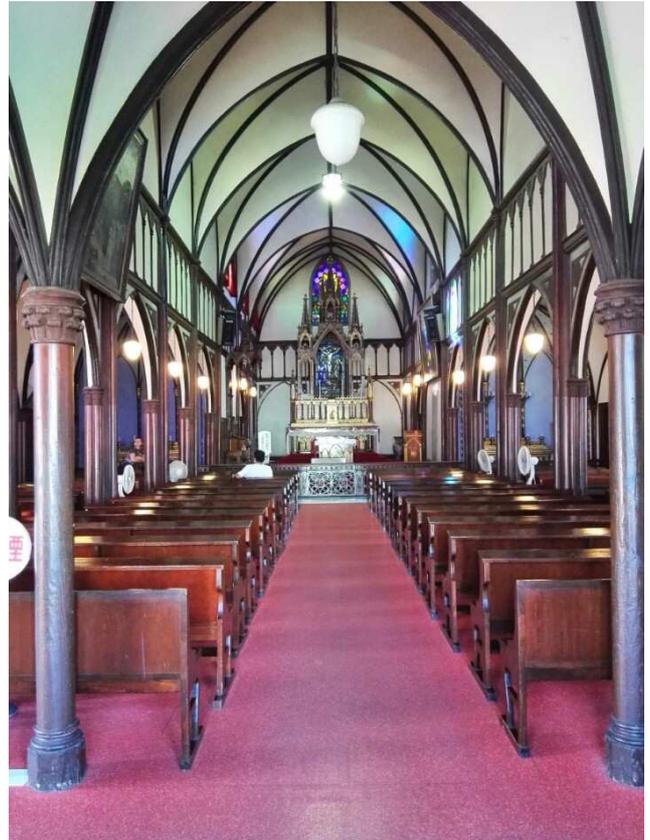
1978 年の春 3 月、大学卒業を控えた時、初めて長崎市を訪ねた。隠れキリシタンやそれに縁のある西洋建築に興味があり、西九州を縦断した時だ。その前、佐世保の先の平戸島を訪ねたので、長崎へはまるで湖のようにないだ大村湾沿いに列車で南下し、諫早(いさはや)経由で長崎駅に到着した。駅近くの旅館に二泊して市内観光に当て、三日目に天草をめざす予定だった。

西洋への扉となった街

翌朝、向かったのは長崎駅の南側、中心部の繁華街を市電で通り抜け、その終端近く「大浦海岸通り」の停留所だった。見上げれば、南にグラバー邸のある南山手の丘。足を向けたのはその手前、活水女子大学のある丘だった。丘へ登る坂道は、通称「オランダ坂」。異国情緒あふれる石畳のままの空間だ。石垣がごつごつと出っ張ったりせず、平板なところが西洋風のイメージだ。坂を途中で取って返し女子大の方に来ると、この街を代表する洋館建築群としての校舎が並んでいた。赤い屋根の白亜の洋館が、緑濃いキャンパスに溶け込んでいた。そこから南に向かい今度は坂を下り、電停「大浦天主堂下」へ向かう。この電停を過ぎると、再び南山手の坂道となる。

天主堂への坂の上り口には、レンガ造りの長崎東急ホテルが建っていた(現在は ANA ホテル)。その三角屋根の塔が印象的で、どこからも良く見え目立っていた。そこを過ぎると、沿道はいかにも観光地らしく賑やかになる。坂を登ると、今度は正面に階段があって、天主堂へと導かれる。会堂は南山手の緑に囲まれ、陽当りのよい丘の上にあった。木造の内部は天井が高く、表面が黒光りする木柱が目立った。外光が注ぐ縦長窓には色彩豊かなステンド・グラスがはめられ、その柔らかな光が赤いじゅうたんの

床に影を落としていた。日本初の国宝指定の洋館だと言う。



大浦天主堂 内部

さて、天主堂の背後の丘上には、グラバー邸があった。野外用のエスカレーターで、苦も無くそこまで上がることができる。幕末維新のエピソードが詰まった場所だが、私には洋館建築の内外こそ興味深いものだった。ろうそくをともしシャンデリアや実用の具としての暖炉など、日本の住宅ではお目にかかれないものを見た。そして何より、大小さまざまな船が浮かぶ長崎港を眺めるのに絶好のロケーションで、春の陽を浴びた港を眼前にみることもできた。

長崎らしい場所を訪ね歩くとしたら、次は港にあるはずの出島だった。「出島はどこにあるんだろう」、丘から降りて街中を歩くが一向にその場所がわからない。そして見つけたのが、コンクリートの模型で構成された「ミニ出島」で、実際の出島は埋め立てにより場所が不明瞭だと知らされた。大変興をそがれる経験だった。

受難に耐えて来た街

南北に長い長崎市は、ちょうど長崎駅を境にその南には県庁や市役所のある古くからの街が広がり、その北には浦上村だった新開地が広がっている。この浦上へも足を向けた。春の天気なのか、午前中の陽光が消え失せ、午後は一転曇り空になった。この地を何となく暗く思うのは、その幾つも重なった受難の歴史のせいである。江戸時代、浦上は隠れキリシタンの地だった。鎖国と禁教令が敷かれる中、キリシタンはその信仰を守るため地下に潜った。江戸時代の二百年間、『踏み絵』に代表される幕府の厳しい統制と密告のため、この地のキリシタンは何度か炙(あぶ)り出され、殉教という血の苦しみを味わってきた・・・。

幕末の開国後、再び西洋人がこの地にやって来た。1864(慶応元)年には、先の大浦天主堂がフランス人神父の手によって建立された。その翌年、浦上村から「ゆり」と名乗る五十代の女性が現れ、キリシタンだと告白した。神父は二百年も信仰を守り抜いた女性に驚愕(きょうがく)した。この時名乗り出た浦上村の人々が、結果的に最後の迫害(四番崩れと言う)の犠牲になったのは皮肉だった。禁教令が解かれたのは、明治も数年たった1873年のことである。

さらに大戦中の1945年8月、この地に人類二度目の原子爆弾が投下され、9日午前11時、一瞬の内に浦上全体が灰燼(かいじん)に帰した。

米軍が広島に次ぐ投下目標としたのは北九州の小倉だった。この日南洋のマリアナ諸島、テナン島から離陸した搭載機は「ボックスカー」。機長はカトリック教徒のC.スウィーニー少佐だった。午前9時45分、小倉上空に達する。しかし目標の軍需工場に前日の八幡製鉄所への空襲による火災で煙幕が広がり、レーダーより目視を原則としたため投下できず、スウィーニーは一旦断念。旋回して再度接近したが、対空砲火に機体を揺さぶられ失敗。三回目はゼロ戦の迎撃を受けこれも失敗した。やむなく機首を第二目標の長崎に向けたという。

午前11時前、長崎上空に達するが、今度は

低空に雲が広がり、目標だった駅より南の繁華街が目視できない。機を旋回させ北西から再度接近した時、突然雲間から市街地が現れ、眼下に三菱の軍需工場が眺められた。爆撃手は「爆弾投下！」と叫び、4.5tもあつた原爆「ファットマン」を落下。その瞬間、機がふわっと浮いたという。一瞬早かった。原爆が降下したのは目標より3km手前の、ここ浦上の中心だった。

「浦上」を歩く

電停の「松山」を降り、その浦上を東へと歩く。すぐに原爆投下地点とその周辺に整備された記念公園に入る。そして公園の階段を上ると、広島ではなく長崎の原爆記念日におなじみの、巨大な平和記念像が高台に鎮座していた。人を畏怖(いふ)させるような巨大な男性像である。平和を求める人々の気持ちを昂揚させようと、像は大きく手を広げていた。



平和祈念像 創作は長崎出身の北村西望氏

曇り空の下を、浦上を代表するその天主堂へと向かう。ここも一段と高い丘上にあり、階段を上る。爆心地から東へ500m。投下時、一瞬の内に会堂は倒壊し瓦礫と化した。戦後は、しばらくその無残な姿をさらしていたという。1959年に再建された天主堂は、その規模では大浦のそれを上回る。しかし、外観はむき出しのコンクリートで作られ、味も素っ気もない。中に入れるのかと思いながら重い扉を開けると、その内部もまた何の飾り気もない。平日の午後遅いせいか、人気(ひとけ)なく何か陰鬱な気

分になった。この姿に満たされぬ思いだったのは会堂の信者たちも同じで、1980年、ローマ法王の来日を前に外観をレンガで覆う工事が完成した。こうして、原爆で倒壊した以前の会堂と同じ外観に戻ったようだ。

浦上で最後に立ち寄ったのが、その北西にあった永井隆博士の「如己(にょこ)堂」だった。博士はあの時、長崎医科大学で被爆するも、被災者救助のため昼夜を問わず治療に当たり、その三日目によりやく自宅に戻り、骨片と化した妻の亡骸(なきがら)を集め埋葬したという。戦後も医大病院で治療にあたったが、被爆前から患っていた白血病が再発。療養のためこの地に小さな庵を立て、遺された二人の幼子に看取られながら昇天した。1951年5月のことである。そこには、「己(おのれ)の如く他者を愛せ」という博士のモットーから、この庵が名づけられたと書いてあった。

修学旅行で訪れる

それから大分時がたった。1996年の秋、勤めていた学校の修学旅行で副担任として長崎入りした。前日は雲仙泊まりで、小浜温泉と諫早(いさはや)を經由してこの浦上に来た。平和学習の一環でまずは爆心地に新装なった資料館を訪ねた。記憶が定かでないが、その後の自由行動の時、再び市電を使い市街中心部の東にある鳴滝の地に出かけた。その奥まった所に、フォン＝シーボルトが構えていた鳴滝塾の跡があり、近代的な資料館が併設してあった。この年の春、シーボルトが晩年を過ごしたオランダのライデン市を訪ね、国立民族学博物館でそのコレクションを見ていたための来訪だった。シーボルトはドイツ出身だが、オランダ政府に医師として雇われ、江戸末期の1823年に出島に来航。もともと東洋研究を目的としていたため、翌年にはこの私塾を開設した。全国から集まった志士に蘭学を教える一方、日本各地の地理・地誌・植生などを探求する場とした。滞在中、彼は毎日

歩いてこの地と出島とを往復した。鎖国時代の長崎に欠かせぬ人物と言えそうだ。

ところで、この時生徒たちと泊まった宿は、港の西側、稲佐(いなさ)山の中腹の崖にとりつくように建てられた高層ホテルで、港側の景色は素晴らしかった。特にその夜景は「千の光」に満ちていた・・・。

三度目の訪問は、2007年春、家族でハウステンボスに遊んだ後、車で西海沿いを南下。ここも長崎市かと思う街はずれに作家、遠藤周作の「文学館」を訪ねた。その後、長崎空港からの帰りの便を気にしつつ市中心部へと向かった



復元中の「出島」

長いトンネルを抜けた所がちょうど「出島町」で、中島川の河口近くに今度は本物の出島が復元中だった。近くに車を止め、入場してみた。当時の雰囲気そのままに、一部の建物が再現されていた。中でも商館長のキャプテン部屋は、畳の広間に白いクロスの食堂テーブルを設(しつら)えた和洋折衷で、その華やかな雰囲気が印象に残った。出島の復元は13年度から第2期に入った。今後、三方も水に囲まれた扇形の「出島」が完成する予定である。もう少しこの地に留まりたかったが、時間がない。車に戻り高速道路で長崎空港にたどり着き、土産のカステラを買って帰路についた。